読売 歌壇

小池　光　選

おもひ出はうつくしきかな逝きし妻と小諸城址をあゆみてゐたり　小美玉市　松山　光

【評】しみじみとした情感あふれて、感動した。亡き妻をおもって、きょうも一日が暮れる。一緒に小諸城址を歩いた。あれから何年経つのだろう。すべては夢のごとしだ。

われと共に老いゆく髪を少しだけ切ってもらえり冬昼下り　仙台市　小野寺寿子

【評】じぶんが老いるとき、じぶんの体の各部品も老いる。じぶんとともにじぶんの髪も老いる。少し切ってもらって、少し若返ったような気がした。あたたかな冬の昼下り。

十円の鰯を十匹買ってきて流しに置いて突っ立っている　垂水市　岩元　秀人

【評】ナンセンス漫画のようでおもしろい。何でこんなものを買ってしまったのか、という買い物がある。食うしかないのだが。

わくらばという言葉知る遠き日の「川は流れる」歌い手も逝く　横浜市　桃井　恒和

前を行く夫に呼びかけ「ねえあなた」振り向きたりし三人の顔　東京都　池野　宗子

する事があまたとなれば辛くなり何もなければなほさら辛し　多摩市　秋元　玉江

ルノアールの描いた娘の豊かさに南斜面に実るオレンジ　太田市　木戸　健房

幾万の青と黄の旗立ち並ぶ兵士の墓標は美しきまで　東京都　榎本　セツ

語るべき友持たぬ我の傍でヒヤシンス咲く「ここにいるから」と　鴨川市　長田　千愛

食パンに小さなチョコを三つのせトーストすれば私の春　大阪府　木村由里亜

栗木　京子　選

液体のごとく上手に子猫たち籠に収まり寝息を立てる　京都市　峰尾　秀之

【評】骨が細くてからだのやわらかい子猫たち。身を寄せ合えばあたたかくて、安心するのであろう。「液体のごとく」という比喩が絶妙で、子猫の愛らしさが伝わってくる。

幼な子は歩き始めた妹に歓声おくる「ベビーしゅごい」と　八街市　宇野香都里

【評】「しゅごい」は「すごい」のことと思われる。少し前まで自身も赤ちゃんだった子が妹に「ベビー」と呼び掛け、歩く姿に感動している。二人に拍手を送りたくなった。

バランス良い食生活を指導され孫のシリアル貰う朝食　川崎市　福本よしき

【評】和食とか洋食とか決めつけず、時には孫のシリアルに挑戦してみるのも新鮮。心のバランスの良さも保たれそうである。

平和なる国に拡がる大悲鳴大谷君は結婚しました　吹田市　前田　尚夫

口開けて空を仰ぎて子供らは雪食まんとす雪よ清くあれ　前橋市　高橋　香

木製のコーヒーミルをわが挽けば幼き孫が手を添えてくる　仙台市　千葉　幸平

丈低く刈り込みたりし山茶花の赤き花びら淡雪に散る　白井市　蝦名　幸子

饒舌なキャスターが急に神妙に政倫審のニュース読み始む　千葉市　佐藤　綾子

履けると見て求めし靴の返品も度重なりて見詰める我が足　前橋市　篠原　恵子

日だまりの墓地に風なく人もなく母に供ふる柿二つ置く　生駒市　手束　弘子

俳　万智　選

読み聞かせた童話を思い出しながら木こりの気分で切るブロッコリー　平塚市　小林真希子

【評】童話の世界が、声に出して読んだ本人の身体に深く染み込んでいる。下の句、「き」の頭韻に加え、ブロッコリーという語も響きあい、声に出して読みたくなる歌になった。

境内の太鼓が響く坂下に侘助一つホフッと咲けり　柏市　塩田　淳文

【評】控えめに春を告げる侘助の花。舞台は坂下、BGMは太鼓。歌に詠まなければ残らない世界の片隅のできごとだ。独自のオノマトペ「ホフッと」が味わい深く効いている。

「ドレッシングは別世界です」千切りの僕を置いてくなんて嘘でしょう？　仙台市　まつのせいじ

【評】「別添えです」の聞き間違いから始まるドラマ。キャベツの気持ちに成り代わるという発想が面白い。

キッチンが物を言うからていねいに答えて妻は味噌汁つくる　八王子市　斎賀　勇

蟬たちの一生思えり日本に君が不在の八日の長さ　豊中市　今西　幹子

杖としてたとへられたる言葉読む節ある太き形状の杖　八王子市　土屋ひろ菜

数式を解くきみの背は見たことのない山のよう、征服したい　埼玉県　玖嶋さくら

とうめいな金貨を胸に受けながら冬の陸路をあなたと歩く　川崎市　からすまぁ

君からの一行だけの返信に心が消えたマックの静寂　大網白里市　滝沢ゆき子

入学の準備を終えた筆箱に今か今かとトンボが並ぶ　東村山市　月出里ひな

黒瀬　珂瀾　選

ゆっくりと月に着陸するように音もたてない僕らの唇　川崎市　全　美

【評】音のない宇宙空間のように、静寂の中に交わされるくちづけ。恋人たちの神秘的な風景です。お互い相手のことを、月のように素敵な人と思っているのかもしれませんね。

咲く梅も散る梅もあり春は来ぬ原発事故のデブリそのまま　福島県　黒沢　正行

【評】東日本大震災から十三年。時は過ぎ、季節は巡る。しかし、危険な溶融燃料のデブリは原発の炉内に残ったまま。まだ何も終わっていないのだという東北の現実がある。

お荷物でごめんなさいと言う妻の体重さらに減ってしまえり　東京都　式守　操

【評】ハンデを抱える妻を懸命に支える。心配なのは妻の身体だけでなく、自身を責めがちなその心だ。夫婦の苦悩に向き合う一首。

この家はいっとう閑かショートへと祖父を預けて新月の母　金沢市　塩本　抄

ふんわりと包みてくるる祖父母居て今の吾あり老梅香る　東京都　堺　公美

難病と共に生き来し老いの身にほくほく匂ふ妻の肉じゃが　松山市　三木須磨夫

「一ヶ月の旅と思ふ」と友人は膝の手術の入院を告ぐ　枚方市　鍵山奈美江

暴れ木の九割の枝伐り落とし見上ぐる庭師九十余歳　鶴岡市　佐藤　繁子

二度三度読み返すなり申告書を歌の推敲するが如くに　所沢市　鈴木　照興

白内障のまなこに仰ぐ北極星の四つ五つと列なして見ゆ　柏市　江口　勲

◇投稿規定◇　はがき１枚に未発表の１作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はひめうつぎ